

変化に介在する「地理」

——編集されつづける地中海都市カンブリルスのかたち——

竹中 克行

1. はじめに

地理学者の関心をもっともよく統合するものが景観の研究だとすれば¹、本特集の主題である人間環境＝風景は、地理学の中核的な対象、つまり地理そのものといってよい。だから、風景とインタラクトするメディアの一つに地理を位置づけることは、一種の同義反復であって、地理学者にとっては意味をなさない問いのようにもみえる。

他方、地理学界を一步離れると、地形や土壌といった土地条件の意味で地理を解釈する人が少なくないことに気づく。景観という多義的で奥行き深い概念に地理を等値するのが、世間一般の地理に対する評価からいささか外れることは否めないだろう。本稿では、そうした地理に対する一般的理解をむしろポジティブに受け止めつつ、地理学の豊かな伝統をふまえて、生態環境に限定しないより厚みのある地理について論じる可能性に挑戦してみたい。つまり、生態環境をわがものとする人間の営みによって組織される空間、換言すれば、自然環境のうえで展開する人間の活動によって、固有のかたちを刻印された空間としての地理である。

このように地理を理解したとき、それがけっして固定的な形態ではありえず、時とともに進化と脱皮を繰り返すかたちであることは、ほとんど自明の理であろう。ある瞬間を生きる人間は、先立つかたちを参照しながら、それを編集することで次なるかたちを発想するからである。個々の時点にたってみれば、生態環境を組織する人間の営みがつくる空間のかたちは、知覚表象のプリズムを通ることで、過去と未来を繋ぐ一種のメディアとして働くともいえる。中谷礼仁は、歴史工学の立場から、「先んじて存在している自然・都市・建築的スケールにおける形態要素」を先行形態とよんだ²。これをヒントとしつつ、本稿では、必ずしも物理的な形態に回収されない思考のなかの形象を含めて、空間のかたちとらえてみたい。

空間のかたちへと翻訳された地理は、人間の眼差しを浴びることでどんな像を結ぶのか。風景が変わりゆく過程に介在する地理というテーマが、にわかに重要性を帯びてくる。

ここで考えておきたいのは、地理をメディアとしてとらえることが、いかなる

1

Mayhew, Susan 編 (田辺裕監訳) (2003): 『オックスフォード地理学辞典』朝倉書店、211頁。

2

中谷礼仁「場所と空間 先行形態論」植田和弘ほか編『都市とは何か』岩波書店、67～99頁。

生活実践と関係しているのかという問題である。地理学の研究者なら、咄嗟に地形図の観察やGIS(地理情報システム)分析を思い浮かべるにちがいない。しかし、筆者が問題にしているのは、地理学の方法ではなく、変わりゆく風景に介在する地理がいかに知覚表象されるかである。そうした視点にたてば、風景を想像・記憶するメディアとして、多くの人が意識的・無意識的に地図を使っていることを前提としつつも、街ゆく人の眼やカメラがとらえる像も視野に入れて、地理が顕在化するさまざまな態様を検討の対象とするのがよいだろう。

以上をふまえつつ、空間のかたちとしての地理が風景とインタラクトするありさまについて、イラストマップなどを含めた広い意味の地図を導線として、具体例に即して考察してみたい。検討材料とするのは、筆者が専門のフィールドとしている地中海都市、なかでも、2012年9月に調査を行ったカタルーニャ(スペイン北東部)の町、カンブリルスである³。

3

本稿に掲載する写真は、とくに断らないかぎり、筆者が2012年9月に実施した現地調査中に撮影したものである。

2. 地図を介してみる都市

2-1 基盤をなす地形・水文環境

4

陣内秀信(2010):「地中海都市」吉田伸之・伊藤毅編『伝統都市① イデア』東京大学出版会、39～69頁。

地中海都市の多くは、記憶しやすい明確な形態をもっている⁴。その基盤にあるのが地形・水文環境である。カンブリルスが位置するタラゴナ平野の主要2都市、タラゴナとレウスを例にとってみよう(図1)。

タラゴナの起源は、古代ローマの属州の都タラコにある。古代には、地中海を見下ろす標高45～80mの高台上(現在の上手地区)に神殿、属州フォーラム、競技場からなる中枢部、海岸付近(下手地区)に港湾・倉庫施設、両者の中間

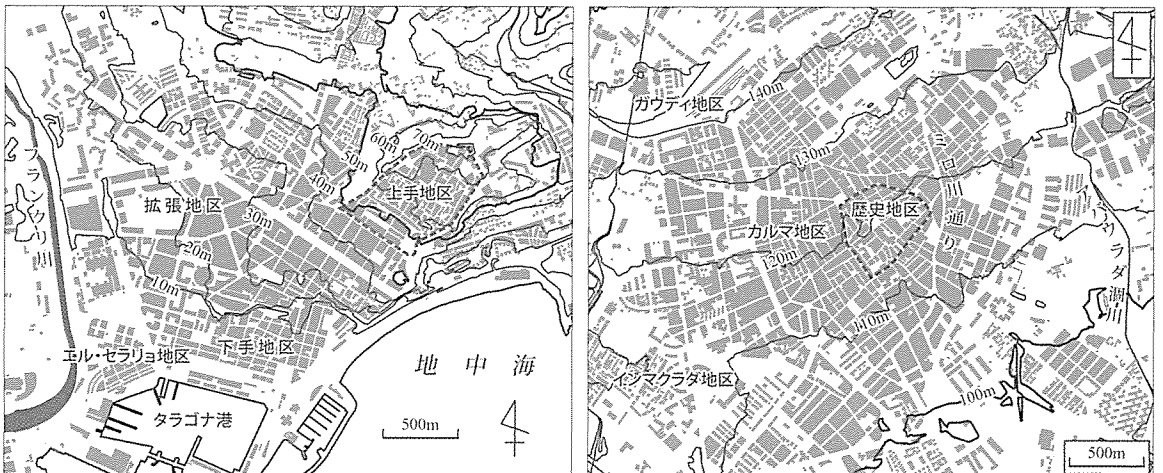


図1 地形・水文環境と都市の形態——左:タラゴナ、右:レウス(カタルーニャ地図院のデータにもとづいて作成)

に位置する段丘上に一般市民の住宅が建設された。古代タラコが廃墟と帰したのち、上手地区に再建された稠密・不規則な街路網をもつ中世都市が現在の歴史地区に相当し、ローマ市壁の遺構がその輪郭をなしている。古代に一般住宅が建ち並んだ海寄りのエリアは、近代都市計画によって方形の規則的プランを特徴とする拡張地区に変わった。20世紀半ばになると、その北西側に円形の新拡張地区、さらに西のフランクリ川周辺の低地に産業地区が建設された。タラゴナの町の輪郭は、生態環境に適応しつつ、先行する建造環境を塗り替えてきた人間の営為を明瞭に映し出している⁵。

タラゴナの内陸側に隣接する都市レウスの場合には、タラゴナ平野の緩斜面を流れる小規模な河川の合間に中世の町が建設された。後背地をなす広大な農村部から出荷される農産物加工品の集散地となったレウスは、地形的な制約の少なさゆえに、中心広場から放射状に延びる街道を軸として、同心円状の市街地を発展させた。ミロ川通りのように、暗渠化された川の流路を辿る街路が、同心円の形に変化を添えている⁶。

5

竹中克行(2011):「建造環境に埋め込まれた遺産の保護・活用をめぐる問題——タラゴナ(スペイン)上手地区の再生」『都市地理学』Vol. 6, 19~34頁。

6

Takenaka, Katsuyuki (2012): Recuperación del núcleo histórico de Reus como espacio de centralidad. *Mediterranean World*, XXI, pp. 89-112.



図2 空から見下ろすカンブリルス(カタルーニャ地図院の写真データによる)

こうした都市の物理的形態は、坂道のアップダウンや街路のカーブといった日々の知覚・経験を通じて、そこを生活の場とする人々のメンタルマップに刻み込まれていることだろう。しかし、地中海といえども、すべての都市が把握しやすい形態をもっているわけではない。恰好の事例は、1960年代以降、観光開発による急激な市街地拡大を経験したカンブリルスにみることができる。人口3.3万人(2011年)のこの町を空から見下ろすと、農地に囲まれた逆T字型の市街地が目に入るが、その構成原理をとらえることは必ずしも容易でない(図2)。

2-2 都市の輪郭を読み解く

現代都市の表層の背後に潜むかたちを読むために、地理学者は、市街地が拡大する前の古い地形図をしばしば参照する。筆者も定式に従い、カタルーニャ地図院が所蔵するカンブリルスの1914年版2.5万分の1地図を調べてみた。

作成当時の技術的な制約ゆえか、地形図と市街図が別々に編集されている(図3)。まず地形図を見ると、なだらかな傾斜を示す等高線の所々にくびれがある。現地語のカタルーニャ語で *riera* または *barranc* とよばれる小河川の流路が等高線と交わる場所だ。地中海の小河川は、乾燥が著しい夏には涸れ川と化すが、秋口に稀に集中豪雨が発生すると、自らの流路さえ変えるような破壊的な浸食・堆積作用をもたらす。このため、流路は破線でやや曖昧に描かれている。

市街図に目を移すと、海岸から1km余り内陸側に蟬のような形でカンブリルスの中心集落が描かれ、海岸線にほぼ平行するバルセロナ＝バレンシア街道が集落の中を貫通している。この街道は、各所で幾筋もの小河川を横切っているが、地図上では橋梁を見出すことができない。これに対して、海寄りを走る鉄道線には、しっかりと橋が描かれている。

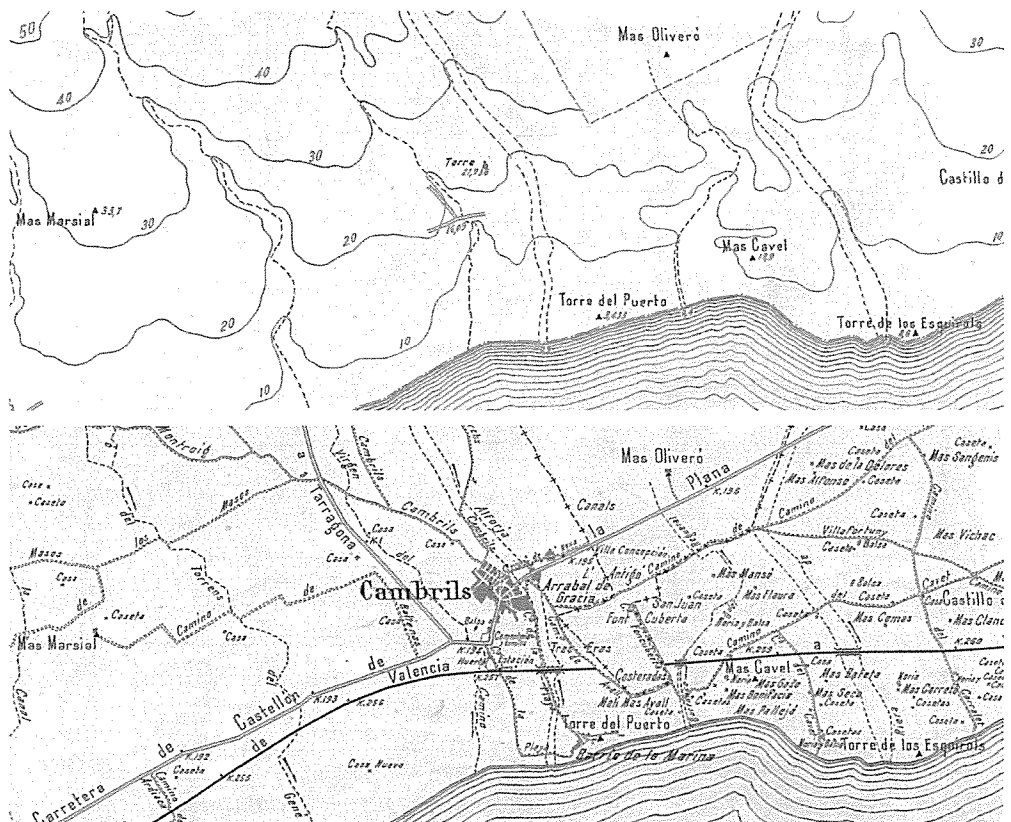


図3 カンブリルスの1914年版地形図・市街図(カタルーニャ地図院所蔵資料。抜粋)

中心集落から海岸に向けて延びる小径を辿ると、海辺の小さな集落に行き当たる。この時代のカンプリルスで集落の体をなしていたのは、歴史地区たる中心集落と港地区だけだった。歴史地区にはサンタ・マリア教会の十字架が小さく描かれ、港地区には見張塔を示す三角形がみえる。前者は、現在のカンブリルスが祝う大祭りの一つ、12月のインマクラダ祭の中心舞台をなす歴史地区の教区教会、後者は、カンブリルスが地中海沿岸の観光・保養地として注目されはじめた1960年代以来、港町の象徴となった塔である。

中世以来、外敵襲来の危険を避けて内陸寄りに発達した歴史地区と、小さな漁村からアパートメントや飲食店が建ち並ぶウォーターフロントへ変貌した港地区という、カンブリルスを構成する2つの核。それらの脇を流れる地中海特有の荒れ川。そして、古代ローマ時代から地中海沿岸の都市を結んできた街道と陸上交通に大変革をもたらした近代の鉄道。こうしてみると、1960年代以降の観光化と世紀末の不動産開発ブームという2つの荒波を受けて、ほとんど掻き消されそうになったカンブリルスの町の輪郭が鮮やかに浮かび上がる(図4)。

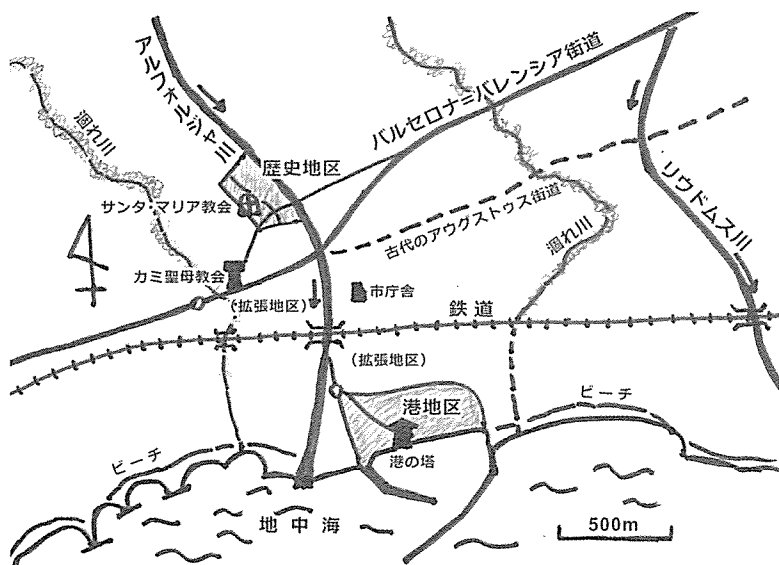


図4 カンプリルスの町の輪郭(筆者作成)

3. 記憶に刻み込まれる形象

3-1 カタストロフィーの経験

ここで、メディアとしての地理の理解がいかなる生活実践と結びついているのか、という冒頭の問いに立ち戻ってみよう。資料室に眠っている地図は、研究者にとっては一級の仕事道具たりえても、人々の思いが交錯する都市の共有

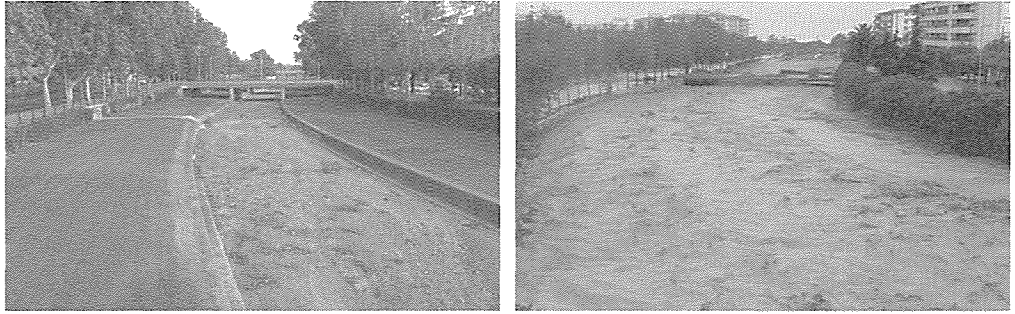


図5 豹変するアルフォルジャ川——左：夏季の涸れ川（2012年9月）、右：集中豪雨時の濁流（1994年10月）
（右写真は Revista CAMBRILS 資料）

像を運ぶメディアとしては、裾野があまりに狭い。しかし、生活経験を通じて記憶に刻み込まれる形象という補助線を挿入すると、心のなかの風景と結ばれた空間のかたちがみえてくる。

たとえば、カンブリルスの歴史地区の脇を流れ、港地区の西側で地中海に注ぐアルフォルジャ川。河床の両脇はコンクリート壁で固められ、その外側を河川敷の芝地が挟み、さらに高い防護壁で道路と隔てられている。晴天続きの夏季には完全に涸れ川と化して、一滴の水もみることのできない日が多い（図5左）。川の存在すらつい忘れそうになる。ところが、突然の秋の到来を告げる集中豪雨が発生すると、川はみるみる濁流と化し、防護壁の幅一杯に怒涛のごとく流れる。百年に一度といわれる記録的豪雨に見舞われた1994年10月10日には、奔流が橋梁を越え、防護壁から溢れた水が市街地になだれ込んだ。地元的主要メディアである月刊『カンブリルス』は、この出来事を丹念に記録映像化している⁷。DVDに収録された生々しい映像は、惨禍を前に立ち尽くす人々、押し流される車、泥まみれの街路で復旧作業に勤しむ消防隊員の姿を、当時の市長へのインタビューを交えて伝える。

地中海都市で調査していると、新聞やラジオといったローカルメディアが市民生活に果たす役割の大きさを痛感させられる。月刊『カンブリルス』の記録映像は、洪水の被害を蒙った人々の苦労を追憶するだけではない。荒れ川の洗礼を受ける宿命を負った地中海沿岸の都市は、カストロフィーの経験を通じて水流に挟まれて形を変える砂場のイメージに重ね合わされ、カンブリルスという町の形象として人々の記憶に蓄積されるにちがいない。

3-2 鉄の道が残した遺産

1994年の集中豪雨のもとで、ほとんど無傷だった場所もある。歴史地区と港地区の間を海岸に平行して走る鉄道線の橋である。鉄道は、人間がつくり出した交通路のなかで、都市空間に対するインパクトがもっとも強いものの一つである。1920年代シカゴ学派の研究者らは、エコロジカルな視点から都市の

7

Revista CAMBRILS: *La força d'una rierada. L'anàlisi i les imatges de la rierada històrica del 10 d'octubre de 1994 a Cambrils* (DVD).



図6 カンブリルスにおける鉄道建設の計画図(1865年頃)(カンブリルス市文書館 Arxiu Municipal de Cambrils 所蔵資料。抜粋)

すみわけを考察するにあたって、物理的な土地条件とならんで、鉄道に代表される人工構造物に注目した⁸。一両何十トンもある列車が疾走する線路は、歩行者が近寄りたがたい危険空間を生み、長期にわたって都市の変化を規定しつつける。日本では、鉄道線が都市空間に与える遮蔽効果ゆえに、駅表と駅裏という言葉が生まれた。

カンブリルス市の文書館で、鉄道敷設計画立案のために1865年頃に制作された地図を発見した(図6)。この時代の地図として例外的ともいべき精巧さに驚かされる一方で、集落からは離れた農地や荒蕪地に鉄道線が計画されたことに気づく。

しかし、両地区を各々核とする拡張地区の建設によって、鉄道線はやがて、アルフォルジャ川との交点で北西と南東から拡大してきた市街地に挟まれる恰好となる。1950年代に建設された北西側の拡張地区には、歴史地区で生まれた当時の若い世代が、現代風の集合住宅を手に入れて移り住んだ。かれらにとって、狭隘な街路に老朽化した家屋が建ち並ぶ建造環境は、いかにも時代遅れと感じられたのだろう。港地区の方では、カンブリルスでバカンスを過ごすスペイン内陸各地の人々やヨーロッパ中北部の外国人を顧客として、夥しい数のアパートメントや別荘が開発され、ビーチにアクセスしやすい鉄道線と海岸の間のエリアを埋め尽くした(前掲図2参照)⁹。地元では、歴史地区と港地区に住む恋人どうしが、人目を忍んで、鉄道橋の下で落ち合ったというエピソードが言い伝えられている¹⁰。

時代の推移とともに、鉄道線はカンブリルスの町にとって忌まわしい物理的障壁と化していった。こうした背景があって、1990年代に始動した「地中海回廊(Corredor Mediterrani)」とよばれる高規格鉄道線の整備計画では、内陸寄りへの新線建設によって、カンブリルスをはじめ、沿岸都市の市街地を横切る線路を撤廃する方向が打ち出された。とはいえ鉄道線は、それを取り巻く土地利用や道路・地割のパターンと合わさることで、カンブリルスにとっては、

8

ゾーボー, ハーベ W.(吉原直樹訳)(1997):『ゴールド・コーストとスラム』ハーベスト社、318頁。

9

カンブリルスの都市発展を扱った基本文献としては、郷土史家のマネル・タレスが月刊『カンブリルス』に公表した連載記事が優れている。Tarés, Manel: "La construcció d'una ciutat. Una aproximació a la història urbana de Cambrils (I i II)". *Revista CAMBRILS*, 413 (desembre 2005) i 414 (gener 2006).

10

カンブリルス市文書館長モンサラット・フロレス氏(Montserrat Flores)へのインタビューによる。



図7 複線の片側を撤去された鉄道（アルフォルジャ川橋梁付近）

すでに確立した先行形態の一部となっている。簡単に消し去ることができない以上、未来の都市をつくるために、先行形態を編集し、再利用に供するという考え方もあってよいはずだ。

鉄の道が残した遺産の再利用を体現するものに、2000年代後半に自治州政権が打ち出した「トラムカム(TramCamp)」構想がある。これは、タラゴナ平野の各都市を結ぶ路面電車の計画で、カンブリルス市内の区間では、地中海回廊の建設にともなう遊休化する旧鉄道線を転用することが予定されている。アルフォルジャ川に架かる橋を西へ渡った路面電車は、歴史地区の西辺を流れる潤れ川沿いに北上し、高速道路のインターチェンジ付近に新設される「地中海回廊」のターミ

ナル駅に接続する計画だという。つまり、鉄道線は残しつつ、路面電車化によって市街地への空間的な統合をはかり、併せて、アルフォルジャ川と平行する都市南北軸のモビリティを活性化する試みである。

こうして、荒れ川と鉄道線が画す都市のかたちは編集されつづけている。筆者が調査を行ったときには、複線だった線路の片側はすでに撤去され、組積造の土台の一部が緑化されていた(図7)。

4. 写真が運ぶ町のかたち

4-1 街角の記憶

町のかたちは、しばしば時間を超越したイメージの対話を通じて、人々の心のなかに実を結ぶ。2006年に「カンブリルス歴史地区総合改良プロジェクト」(略称「地区プロジェクト」)が動き出したとき、モンサラット・バンドレイ氏(Montserrat Vendrell)をコーディネータとするチームが真っ先に取り組んだのは、歴史地区に死蔵されている古写真の発掘だった。地区住民から寄せられたおよそ150点の写真には、人々が集うスペイン広場やアルフォルジャ川に面した散歩道の風景、三輪車を乗り回し、手をつないで遊ぶ子どもたち、テラスのテーブルを囲んでポーズを取る町衆、クリスマスの飾りつけが眩しい公設市場など、祖父母が生きた時代のカンブリルスの生活景が収められていた¹⁾。

集まった写真を前に、次に、同じ場所やセッティングをとらえた現在の写真が募集された。新旧の写真を組み合わせてスペイン広場に屋外展示した企画「地区のポートレイト」(2011年3～4月)は、過去を回顧するにとどまらず、時を超えて繋がる町のかたちと埋め込まれた無数のストーリー、そしてそれらを育みつづける人間の営為に対して、住民自らの目を開かせた。

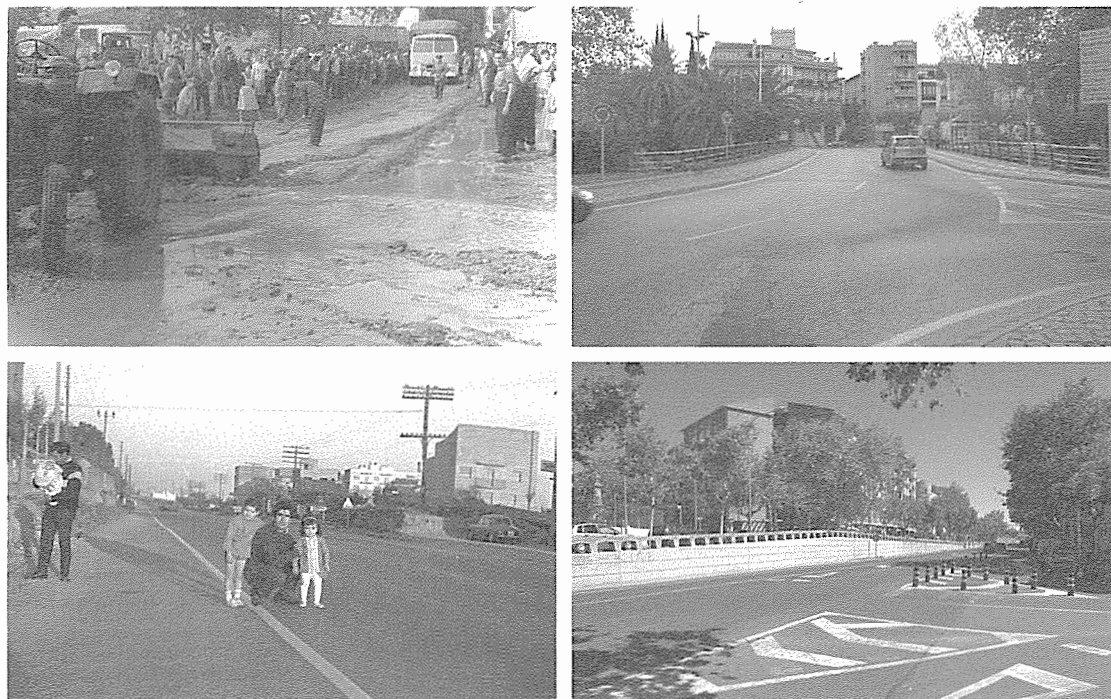


図8 バルセロナ=バレンシア街道のポートレート——左上：アルフォルジャ川渡河点（1959年）、右上：同じ場所に架かる橋（2012年）、左下：カミ聖母教会付近から見る新国道（1975年頃）、右下：道路の対面からみた新国道（2012年）（左上／左下写真はカンブリルス市文書館 Arxiu Municipal de Cambrils 所蔵資料）

カンブリルス市文書館（Arxiu Municipal de Cambrils）の力添えを得て、筆者なりの町のポートレートをつくってみた。注目したのは、町の輪郭の一本を構成するバルセロナ=バレンシア街道である（図8）。この道の起源を辿ると、古代ローマが建設したアウグストゥス街道に行きつく（前掲図4）。その後長らく、中心集落に入り現在のスペイン広場南を横切る道がメインルートとなっていたが、1966年には、自動車交通の増大に対応するために、再び歴史地区の南を通り抜ける経路へ付け替えられている。

文書館では、街道がアルフォルジャ川を渡る地点で撮影された写真が何枚も見つかった。ここは、カンブリルスを貫く2つの軸が交差する場所だけに、撮影ポイントとして選ばれることが多かったのだろう。しかし、1959年の写真がとらえているのは、豪雨のダメージを受けた道路を復旧する工事と足止めを食らったトラック、それに模様眺めする人々の姿である（図8左上）。つまり、世紀初頭の市街図（前掲図3）でみたように、かつてのアルフォルジャ川で架橋されていたのは鉄道線のみであり、バルセロナ=バレンシアを結ぶ幹線国道ですら、河床の上をそのまま横切っていたのだ。対する現在の写真は、1970年代に行われた河岸整備事業の結果、街道と川の交わり方が一変したことを物語る。固い護岸と並木の緑が川を両側から挟み、街道との交点には、自動車通行の便

をはかるために、ロータリー型の橋が載せられている(図8右上)。ロータリー外側の一角に目を凝らすと、歴史地区南へ街道が付け替えられた後に残された石畳の街路の入口がみえる。街道としての視覚的・機能的な連続性は、すでに失われているのだろう。その一方で、緑の回廊としてきれいに一体整備されたアルフォルジャ川は、豪雨のたびに、人々の意識からしばし遠ざかっていた荒れ川としての本性を露わにする。

新国道に視線を向けよう。整備後10年が経過した1970年代半ばの写真には、車道の中に立つ父子の姿がみえる(図8左下)。車が頻繁に行き交うようになった現在では考えにくいセッティングである。実際、その後の交通量増大を受けて、国道と平行する生活道をコンクリート壁で分離するデザイン変更が行われた。生活道としての役割を失った街道は、歴史地区と拡張地区の間を分かちほとんどバリアのような様相を呈している(同右下)。

4-2 街道の守護聖人を祝福する

こうして日常性との接点を失ってゆくかのようにみえる街道は、実は、カンブリルスという町のなりたちと深い関係をもっている。20世紀初頭の市街図を改めて観察すると、当時の街道が歴史地区南西で大きく折れ曲がっていたことがわかる(前掲図3)。この角にたつのがカミ聖母教会である。「カミ(cami)」は「道」を意味するカタルーニャ語だから、カミ聖母教会は街道の守護聖人を祀る教会ということだ。バルセロナからタラゴナを通してバレンシア方面へ向かう旅人にとって、カンブリルスからエプロ川河畔のトゥルトザまでの60km余りは、途中に身を寄せられる村がなく、危険に満ちた行程だった。そうした旅人に加護を与えてきたのが、カンブリルスのカミ聖母というわけである¹²。

ところが、文書館が所蔵する1940年以前の古い写真がとらえているのは、塔上に光学通信(腕木通信)施設が置かれ、塔と教会の周りに墓地の石棺が

12

Ortiga, Ramon i Vidal (1991): *Història gràfica de Cambrils*. El Medol, 194p.



図9 カミ聖母教会——左:バルセロナ=バレンシア街道からみる教会(1940年以前)、右:教会塔横で開かれたベルモット会(2012年)(左写真はカンブリルス市文書館 Arxiu Municipal de Cambrils 所蔵資料)

まとわり付く、いささか不格好な姿である(図9左)。教会に対する攻撃が渦巻く近代史のなかで周辺化した場所がそこに見出されるといっても、的外れではないだろう。

カミ聖母教会の重要性を見直す動きが活発化したのは、1990年代以降における大祭りの再編を通じてであった。それまでは、港地区を中心とする夏のサン・ペラ祭と冬の歴史地区で行われるインマクラダ祭というように、ライバル関係にある両地区が別々に大祭りを祝っている印象が強かった。2つの地区の間でバランスを取ることを一つの理由として、歴史地区にあった古い市庁舎は、1995年、港地区との中間点に位置する新規造成地に移される。そうしたなかで、1991年に祭り好きの町衆が結成した団体「トタ・ランデンガ(Tota l'Endenga)」は、町の力を結集する祭りの必要性を訴え、カミ聖母にまつわる記念行事を継承しながら、市とともに新しい祭りづくりに取り組んだ¹³。かれらが注目したのは、歴史地区の住人たる農民と港地区の漁民が協力して、カミ聖母教会建設のためにバルセロナ遠郊のモンサラット山の切石を運んだという言葉伝である。努力は実り、カミ聖母祭は、カンブリルスを代表する大祭りに育った。

こうして、地区の間を隔てる境界線になりつつあった「カミ」、すなわち街道は、道ゆく旅人を守ってきた聖人を祝福する祭りを通じて、新たな表象を与えられた。大祭りの巨大な人形が教会に到着すると、黒シャツを着たトタ・ランデンガのメンバーをはじめ、町衆の盛り上げるベルモットの宴が教会塔の傍らで始まる(図9右)。教会の壁を見ると、移転撤去された墓地の石棺の跡がくっきり残されていた。

5. 生きられる町のかたち

5-1 都市像の共有

町のかたちに対する意識の覚醒は、ときに、それを地図を介して共有しようとする行動を生む。例として、カンブリルスのまちなか商業活性化を進める事業者団体「カンブリルスまちなか事業者組合(Associació de Comerciants i Empresaris Vilacentre)」が市と協力して作成・頒布したイラストマップを手に入れてみた。カミ聖母教会、公設市場、サンタ・マリア教会など、生活に密着したモニュメンタルな建造物がまず目に飛び込んでくる(図10)。歴史地区の街路は、濃い目の彩色を施されて、古代ローマの宿営のような姿を現している。「地区プロジェクト」では、歩行者の視点からの生活・商業空間の活性化を目的として、路面全体に一様に舗石を敷き詰めて歩道の段差を解消し、箱形の植木鉢の設置による緩やかな歩車分離に切り替える空間整備が行われた。マップの

13

カンブリルス前市長ルベルト・ベナイジャス氏(Robert Benaiges)およびトタ・ランデンガ幹事を務めるジョアン・アストラダ氏(Joan Estrada)への個別インタビューによる。ベナイジャス氏は、カタルーニャ社会党(PSC)のカンブリルスにおけるリーダーで、1997～1999年および2003～2011年の2回にわたって市長を務めた。アストラダ氏は、一時期、保守系ナショナリスト政党「集中と統一(CiU)」選出の市議だった。



図10 カンブリルスまちなかマップ(カンブリルスまちなか事業者組合/カンブリルス市作成
資料“Vine a Vilacentre: La teva zona de compres”より抜粋)

彩色には、舗石の存在によって異化された歴史地区の姿を強調する意味があるのだろう。他方、主役であるはずの商店や飲食店は、小さなナンバリングで地図中に埋め込まれているだけで、詳細情報については、裏面を参照するようになっている。地図としての情報伝達効率はともかく、ショップ情報のみを剥き出しにせず、建造環境に溶け込ませるセンスに、事業者団体と市の協働による公共空間の表現をみることも、あながち無理ではないだろう。

町のかたちを掴むセンスは、さりげない祭りの表現のなかにも見出すことができる。カミ聖母祭の火ぶたを切って落とす「ファイヤー・ナイト(Nit del Foc)」は、カタルーニャに広く定着している「火走り(correfoc)」祭りの一種で

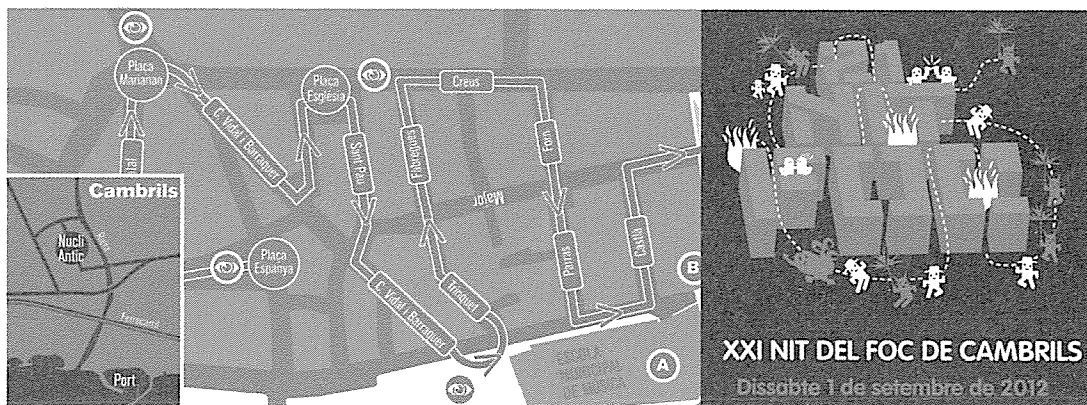


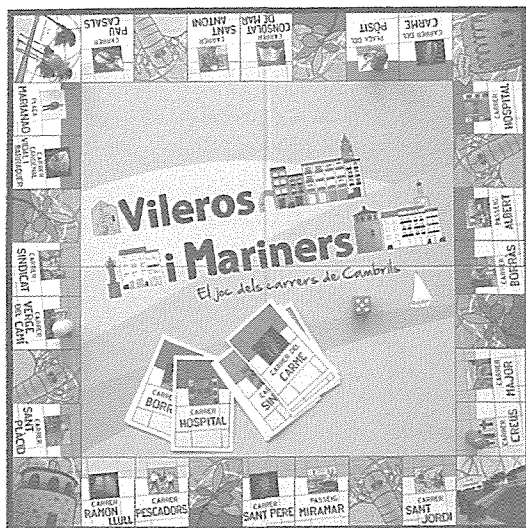
図11 「ファイヤー・ナイト」案内マップ(トタ・ランデンガ作成資料“XXI Nit del Foc de Cambrils”より)

ある。初日の夜、「悪魔」の名をもつ祭り団の連中が、ヤギのような角と鳥の羽をつけた怪物「ラ・ファルナカ」とともに、火花を撒き散らしながら歴史地区の街路を闊歩し、踊りまくる。もちろん、これには決められたルートがあって、案内マップには、眼球マークで見物スポットまで示されている(図11)。火走りなら、なぜもっと広い通りで行わないのかという疑問もあるだろう。しかし、建て詰まった歴史地区だからこそ、炸裂する花火や爆竹が街路空間に反響し、火の踊りの迫力と躍動を肌身で感じることができる。経路に当たった家屋は段ボールなどで自衛しなければならぬと、市の通達で定めているほどだ。折り畳み式案内マップの表紙には、「21 NIT FOC」という文字を歴史地区の建物に見立てて、怪物や悪魔がミツパチのように飛び回る情景が表現されている。

火走りは、1980～1990年代にカタルーニャ各地に広まった。この「新しい」祭りは、中世に起源をもつとされる悪魔の踊りと融合しながら、町の内外から多様な人が集まる濃密な歴史地区の雰囲気、身体の動きで表現する。歴史地区の空間のかたちは、不断の再解釈を受けて、編集されつづけているのである。

5-2 ライバルどうしの町で「遊ぶ」

都市のかたちには、必ずしも街路や建造物が有する物理的形態でとらえられない、人々の思考や記憶のなかの形象としての側面がある。物質性に回収されないかたちの方が、大きなインパクトをもつことさえあるだろう。しかし、地中海都市でフィールドワークを続けていると、記憶のなかの形象が物理的な環境との間で結び結ぶ相互交渉的な関係に否応なしに気づかされる。街路や広場での個人的な経験に触発され、人々の頭のなかで像を結ぶ都市のかたちは、しばしば、イラストマップなどの柔らかい表現を通じて、再び物理的な形態へと翻訳されてゆく。



カンブリルス歴史地区の地区プロジェクトが取り組んだ事業の一つに、「モノポリー」の地元版とでもいうべきボードゲームの販売がある。タラゴナ上手地区の地区プロジェクトが打ち出した「タラコポリス」とルールは同じなので、ゲームとしてカンブリルスの独自性があるわけではない。しかし、「町人と漁師 (Vileros i Mariners)」というゲームの名前やプレイヤー間の取引対象とされる街路・広場のイラストには、歴史地区と港地区のライバル意識をくすぐりつつ、それをゲームに転じる遊び心の妙を感じる(図12)。盤の中央には、地中海の青からタラゴナ平野農村の緑へと変化する色彩があしらわれ、中世以来の目抜き通りであるマジョ通りに入る門、そしてウォーターフロントを象徴する港の塔が添えられている。ゲームの起点となる右上隅にはカミ聖母教会の塔が置かれ、

対角には海の塔、そして驚くべきことに、残りの2つの角にはアルフォルジャ川の氾濫と地中海に吹き下ろす冷たい強風「ミストラル」が描かれている。カタストロフィーの記憶まで織り込むとは、出来すぎともいえる地理的表象ではないか。さらに、ゲームとしての遊戯性が合わさることで、生活世界を広げつつある子どもたちにとっては、自分の町のかたちを知り、記憶するための愉快的な「マップ」となるにちがいない。

6. おわりに

社会学の立場から都市論に刺激的な問題提起を続ける若林幹夫は、『都市のアレゴリー』のなかで、形象を喪失した空間として現代都市を提示している。「(…)都市の創建の神話や、都市空間の底に隠されたコスモロジー、都市内のさまざまな場所や建物に刻まれた歴史的な出来事の記憶等が、その土地を共有する人びとの日常的な実践や意識と共に、『都市という社会』を一個の空間的な同一性をもつものとして作り成す」¹⁴のが前近代の形象化された都市であったとすれば、そうした全体的な連関や一体性を欠いているのが現代都市だという。社会理論に空間概念を積極的に組み込んだマスエル・カステルの新都市社会学やデイヴィッド・ハーヴェイのマルクス主義地理学が、実のところ、形象として描ける全体性をもった社会としての都市分析を断念するものであると指摘した氏の慧眼には、敬意を表したい。

現代都市が形象を失ったのだとすれば、あえて都市のかたちにこだわることは、記号論的な意味作用の分析に自ら溺れるような、ある種ユートピア的な抵抗にすぎないのだろうか。そうしたありうべき解釈に対して、地中海都市をフィールドとしてきた筆者は、建造環境に埋め込まれた古代の遺構や時代を

超えて継承される都市プランといった物理的な形態が、今日も都市のかたちを強く規定していることを強調してきた。しかもこれは、古代に遡る石の文化に支えられた明確な物理的形態をもつ地中海都市でのみ成立する議論ではない。本稿では、生態環境とそれを組織する人間の営みがつくる空間のかたちを広く地理ととらえ、それが人間の知覚表象を介することで、過去と未来を繋ぐ一種のメディアとして機能することをみてきた。そうした働きが成立するために、何か特別な地理が必要ということはない。

本稿で対象化したカンブリルスのかたちは、地中海特有の荒れ川、町から町へ結ぶ街道と近代に登場した鉄道線、歴史地区と港地区を象徴する塔など、他の町にもありそうな一見ありふれた要素の集合で成り立っている。しかし、他の都市が容易にコピーできないカンブリルス固有のかたちがあるとすれば、それは、ある一瞬を生きる人間の想像力によって先立つ空間のかたちが解釈され、次なるかたちを生み出すメカニズムが恒常的に働いているからではないか。19世紀後半に建設された鉄道線は、ライバル関係にある歴史地区と港地区を隔てる物理的障壁として人々に意識され、これを路面電車化によって日常性の空間に統合することが新たな課題として浮上した。バルセロナ＝バレンシア街道は、街道の守護聖人を祝福する祭りの勃興とともに、町の軸線としての求心力を取り戻しつつある。折しも、2000年代には、はるか内陸側に無料の自動車専用道が開通し、カンブリルスの「カミ」は、ようやく大量の自動車交通から解放されることになった。こうした事例を観察するにつけ、都市には空間のかたちを生み出しつづける力が宿っている、あるいは、そうした営力をもつ都市は今も健在であると、あえて樂觀したくなる。

しかも、多くの人の関与を通じて知覚表象された地理は、しばしば次なる都市のかたちを生み出す触媒の役割を果たす。新しい町のかたちを模索し、脱皮を繰り返すことは、都市が生きつづけるための必要条件といってもよい。この点でも、カンブリルスの例は示唆に富む。



図13 カンブリルス市Webサイトのトップページ (2012年11月20日) (<http://www.cambrils.org/>)

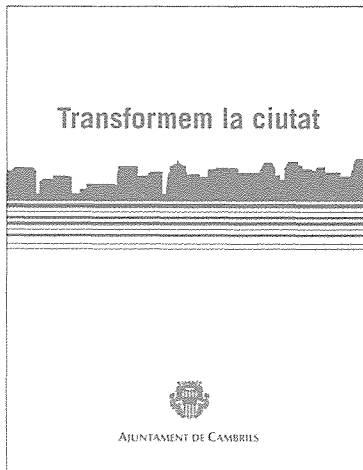


図14 「都市を変革しよう」——カンブリルス市が配布したメモ帳

15

Rossi, Aldo (1966): *L'architettura della città*. Marsilio, 217p.

歴史地区と港地区のライバル意識を町の財産へと転じる発想は、町衆のなかから生まれ、カミ聖母祭へと結実した。そして、この聖母祭が体現する地区間の相互補完性にもとづく町の団結は、ゲーム盤上の遊びを通じて将来を担う子どもたちの意識に沈殿してゆく。他方、レストランのテラスが連なる港地区のウォーターフロントは、たんなる観光消費のための空間を超えて、すでに市のWebサイトの表紙を飾る町の顔となっている(図13)。17世紀の海の塔を除けば、特別な歴史文化的価値を認められていない建物の集合体にすぎない。しかし、高層建物が林立する隣町のサロウとは違って、1964年の都市計画マスタープランで早々と高層建築を禁じたカンブリルスでは、塔と肩を並べる建物群のつくるシルエットが水面に映る姿は、立派な町のアイデンティティの一部である。そうした町のかたちは、ときに、将来のカンブリルスを展望するためのモチーフとして表象される(図14)。

イタリア人建築家アルド・ロッシは、著書『都市の建築』¹⁵のなかで、変化し消えゆく都市の機能に対して、機能とは独立に維持される形態の価値を強調した。ロッシが見慣れていたのは、ルネサンス以来のイタリアが称揚した劇場性を内包する都市空間だったかもしれない。しかし、形態は意味をつくり出す源であるというロッシの主張は、たとえば、民主化後のバルセロナ郊外における大規模開発地区の再生といった政策的実践にも大きな影響を与えた。一見平凡にみえる都市をユニークな存在とし、町の求心力を育むためには、生態環境を飼い慣らす人間がつくる都市のかたち、すなわち変化に介在する地理の役割が重要であることを指摘して、本稿の締め括りとしたい。